

聖書: エステル記9章1～15節

説教: 柱にかけられた者

はじめに

いまからおよそ二千五百年前、ペルシャ帝国クセルクセス王の側近であったハマンは国内に住むすべてのユダヤ人を根絶やしにするようにとの法令を出したことを知った王妃エステルは、ユダヤ人を救うために立ち上がり、いのちをかけて「ハマンは悪人である」と王に告発します。ハマンは王が最も信頼していた部下だったので、王妃が訴えたからと言って普通すぐに部下を罷免などはしないでしょう。ところが、エステルからハマンのことを聞かされる前に、王は別のルートからハマンが悪事を働いているとの情報をつかんでいたもので、「やっぱりそうか」と即座に納得することになり、結局ハマンは柱にかけられて処罰され、代わってエステルの育ての親であったモルデカイが王の側近となります。

しかしこれで問題が解決したわけではありません。ハマンが出した法令には王の指輪で印が押されていたので、誰も取り消すことができず、ユダヤ人の苦しみはそのままなのです。彼らを救うためには、新たに法令を出して前の法令が事実上効力がなくなるようにするしかありません。そこでエステルは王の前でもう一度身を低くし、王の許可をいただいてモルデカイが新たな法令を出し、すぐに国中に発布されていった。これが前回までのあらすじです。

## 1 疑問

今日のところを読んで皆さんどう思ったでしょうか。疑問に思うことがいくつかあるのではないのでしょうか。例えばこうです。

アダルの月（今の暦で2月）の十三日、法令が実施されたときのことが5節にある。「ユダヤ人たちは彼らの敵をみな剣で打ち殺し、虐殺して滅ぼし、自分たちを憎む者を思いのままに処分した。」虐殺した人数が五百、三百、七万五千人とあり、ハマンの子十人の名前も具体的に挙げられています。いくら法令とは言え、ここまでしてよいのか。まずそこに引っかけたのではないのでしょうか。

それだけではありません。法令では、アダルの月の十三日の一日だけ実施するようにとあったのに、エステルはそれでは足りない、もう一日延ばして欲しいと王に願い、許可が下りると続く十四日

も集まり、ハマンの息子たちを柱につるし、ササで三百人を殺させた。これはどういうことか。エステルは謙遜だと思っていたら、ユダヤ人の敵となるとメラメラと復讐の炎を燃え上がらせる執念深い女性だったのか。もちろんそんなことはないはずです。ユダヤ人がしたこと。エステルがしたこと。すべてそこには神様のなにかのご計画があったと考えるべきでしょう。それはなにか。

## 2 ユダヤ人

### 1) ハマンの法令とモルデカイの法令

そこでまず、これはおさらいになりますが、ハマンが出した法令はどのようなものであったのか、もう一度確認します。3章13節。「若い者も年寄りも、子どもも女も、すべてのユダヤ人を根絶やしにし、殺害し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪えとあった。」

最初にも申したとおり、ハマンはこの法令に王の指輪で印を押しましたから、王でさえ取り消すことができません。これが無効となるようにと、モルデカイが出した新たな法令はこうです。8章11節。「自分たちを襲う民や州の軍隊を、子どもも女たちも含めて残らず根絶やしにし、虐殺し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪うことを許した。」

ハマンの法令を無効にするためには、それに見合うような強い内容にしなければなりません。二つを比べると、襲う方と襲われる方と、それぞれ入れ替わって正反対になっていますが、「根絶やしにし、虐殺し」というような厳しいことばがどちらにも出てきて、内容としては似たものとなっています。しかしよく見ると大きな違いがある。二つあります。

### 2) 自分たちを襲う者がいるなら

まず一つ目。ハマンは、「若い者も年寄りも、子どもも女も、すべてのユダヤ人を根絶やしにし」と書いた。誰でもユダヤ人であるならば、無差別に、無条件に殺せということです。ではモルデカイはなんと書いたか。「自分たちを襲う民や州の軍隊を。」もしも襲ってくる者がいたらばという条件が付いている。別の言い方をすれば、襲う意志がない者には絶対に手を出してはいけない。そういう条件をつけて無差別に殺すことを禁じている。そこが大きな違いである。その結果どうなったか。2節。「ユダヤ人たちは、自分たちに害を加

えようとする者たちを手にかけてようと、クセルクセス王のすべての州にある自分たちの町々で集まったが、だれもユダヤ人に抵抗する者はいなかった。彼らへの恐れが、すべての民族に下ったからである。」

基本的にはだれもユダヤ人を襲う者はいなかった。では全然いなかったかというところではなく、やはり敵対する者たちがいた。それでユダヤ人は身を守るために、手にかけてざるを得なかった。それがさきほどの人数になったわけです。

### 3) 略奪品には手を出さなかった

ハマンとモルデカイの法令の違いの二つ目。ハマンは、「彼らの家財をかすめ奪え」と書いて、なにがなんでも全部奪うように命令した。しかしモルデカイは「彼らの家財をかすめ奪うことを許す」と書いて、奪うかどうかは本人の判断に任せた。「絶対に奪え」ではないのです。結果どうなったか。5節に「思いのままに処分した」とあるので、てっきりこんな光景を想像してしまうのです。海外などで大きな地震が起きると治安が悪くなり、町の人たちがスーパーのシャッターを壊して商品を勝手に持ちだしていく、そんなニュースを見ることがあります。それと同じように、ユダヤ人もやりたい放題やったかのような印象を受けますが、決してそうではない。10節と15節に「しかし、略奪品には手を出さなかった」とあります。法令では、敵の財産を奪ってもよいと書いてあるけれど、だからと言ってそうはしない。略奪品には絶対に手を出さなかった。冷静にことに対処しています。

そうすると、襲って来た者を何人殺したか、ここに具体的な数字が挙げられてはいるけれど、これは暴動のようなことが起きて、無差別に殺したのではなく、襲ってくる人たちがいたのでやむなくこうせざるを得なかったということになります。別のことばで言えば、モルデカイの法令に従おうとしない者たちがこの数だけいたということになります。

## 3 エステル

### 1) 王に逆らう者たち

エステルはどうだったのか。ほかのユダヤ人たちが落ち着いて行動したのですから、エステルもそうだったと考えるべきでしょう。法令の実施をもう一日繰り返すように頼んだのにはやむにやまれぬ理由があったことになる。それはなにか。エステルはこう願っています。13節。「もしも王様がよろしければ、明日も、スサにいるユダヤ人に、今

日の法令どおりにすることをお許してください。そして、ハマンの息子十人を柱にかけてください。」ハマンの十人の息子は十三日に手にかけてられています。それなのにわざわざなぜ柱にかけるのか。それだけではない。この日、スサでは三百人が殺されています。

いったいどういうことか。モルデカイは王の権力を全面的にゆだねられ、行政の長官や役人はすべてモルデカイを恐れていました。ところが、モルデカイの法令に逆らい、襲いかかる者がこれだけいた。それは何を意味するか。事態はもはやユダヤ人だけの問題ではなくなっている。モルデカイの法令を出したことを機会に、普段から王を裏切ろうと思っていた人たちが一斉に蜂起してクーデターを起こそうとした。誰がその先頭に立ったのか。王に恨みを持っているハマンの息子たちです。彼らは、モルデカイの策略で父親のハマンが不名誉な死に方をしてしまったと思込んでいる。父親をおとしめたモルデカイ、その彼を側近に据えた王を許すとはできない。それで王に不満を持つ者たちを集めてクーデターを企てたということでしょう。

### 2) 争いを止めるために

エステルがもう一日延ばして欲しいと願い出たことは、彼らのなきがらを柱につるすことでした。反対勢力のリーダーである十人の息子を柱につるすことで、王に逆らおうとする人たちの心をくじき、武器を捨てて王に立ち返るようにさせた。決して、恨み辛みを晴らすために、こんなことをしたのはありません。争いを止めるために、エステルは王妃でありながら王の前で身を低くし、自分を犠牲にしていくのです。

## 4 神

### 1) 柱にかけられてのろわれた者となる

血なまぐさい話しばかりの今日の箇所ですが、どこに神の恵みがあるのでしょうか。申命記21章23節に「木にかけられた者は神にのろわれた者だからである」とのみことばがあります。ハマンの十人の息子は、神にのろわれた者となって木につるされたことになります。父親がユダヤ人を根絶やしにしようとしたことで処刑されると、そのことを逆恨みして王に反逆しようとしたのですから、当然ということかもしれません。

しかし木につるされたのは彼らばかりではなかったのです。イエス・キリストも十字架におかかりになりました。この方が木にかけられるのは当然

だったのか。この方は、ハマンの息子たちのように王に逆らったのでしょうか。いいえ。この方こそユダヤ人の王だったのです。王である方を十字架につけたのですから、逆らったのはほかでもない、私たちだった。私たちこそ、木につるされてのろわれる者とならなければならなかった。それなのに、この方はなにも不平を言いません。ほふり場に引かれていく羊のように黙って十字架におつきになった。

## 2) 和解の主

どうしてでしょう。エステルがしたこを見てください。王に逆らうのを止めて、和解しなさい。争いを止めるために、あえてハマンの十人の息子たちを柱につるしました。それと同じように、主はご自分を木につるすことによって、私たちに和解を呼びかけておられます。「いつまで神に逆らっているのですか。もう争いを止めて、神に立ち戻りなさい。もしこの十字架を信じるなら、あなたが神に逆らった罪は赦される。そのことを信じて戻りなさい。」

神に戻るのが怖いと思うのでしょうか。戻ったら神は厳しく罰するに違いないと思うのでしょうか。神である方が十字架でどのようなお姿とられたのか、よく見てください。のろわれた者となりました。目をそむけたくなるようなお姿です。恐ろしいのはどっちですか。神の子を十字架にかけた私たちの方がよほど恐ろしい。そんな私たちを神は釘に刺された手を広げながら待っておられます。